

強く響きあう部分が見つかるからである。

たとえば「靈氣療法」には、「五戒」と呼ばれる日々の心の持ち方を教える詩句が存在する。現在のレイキ実践者にも大切に唱えられているものだが、これに非常によく似た句が、一九一四年に発行された鈴木美山『健全の原理』に収録されている。

『健全の原理』は、鈴木が唱導していた典型的な「精神療法」の一つ、「健全哲学」についての書物で、同書の壮大な「哲学」の体系により精神を正しく保つことで、身体を「人間本来の健全な状態」とするという、メアリー・ベーカー・エディ（クリスチャン・サイエンス）の影響を受けた論理が展開されている。

また、「靈氣療法」が想定している、宇宙に充滿し心身を癒す「エネルギー」という存在は、「精神療法」に広く見られるものである。たとえば高木秀輔が一九二五年に発表した「人体アウラ靈氣術」は、「プラナ」や「アウラ」とも言われる宇宙に満ちる「精気」を補うことで健康を取り戻そうとする療法であった。高木も同書の中で「五戒」と類似する句を使用しており、臼井の「靈氣療法」と何らかの関係があるか、同じ情報源を参照していたことが推察される。

このように、レイキは臼井の「独創」というよりは、同時代の「精神療法」のコンテキストに深く根ざした存在であった。「精神療法」の時代に生まれて現在も実践されている代替療法は他にも多く、今後それらの関係はさらに調査・考察されるべきだろう。

サイコロジカル・ファーストエイドにおける宗教の役割

井上ウイマラ

災害後の復興段階としては、一、救急救命期（生存の可能性のある人の救命活動が中心となり、最初の七十二時間が鍵となる。軍队的な指揮系統が重要な役割を果たす）、二、被災者支援期（食料、水、医療サービスなどの救援活動が中心となり、社会福祉協議会により避難所やボランティアセンターなどが設立される）、三、生活復興期（瓦礫の片付け、仮設住宅の設営、臨時生活生産設備の設営などが中心となり、宗教色を帯びた支援活動は締め出され始める）、四、生活再建期（日常生活や地域コミュニティの再建が中心となり、心のケアの重要性が増してゆく）に分けられる。こうした諸段階の中で、発災直後に災害現場に入って被災者を支援する人々のために作られたサイコロジカル・ファーストエイド（以下PFAと略称）の存在が注目され始めた。

PFAは、アメリカ国立子どもトラウマティックストレス・ネットワークとアメリカ国立PTSDセンターによって作られ、兵庫県こころのケアセンターが二〇〇六年の改訂版を翻訳してホームページに掲載していた。それが、今回の震災を機に二〇一一年七月に医学書院から『災害時のこころのケア…サイコロジカル・ファーストエイド 実施の手引き』として出版された。

PFAは、災害やテロなどのトラウマ的出来事によって引き起こされる初期の苦痛を軽減し、短期・長期的な適応機能と対処行動を促進することを目的としている。その原理と手法は次

の四つの基本的規格を満たしている。一、トラウマのリスクと回復に関する研究成果に合致する。二、災害現場得の適応が可能で、実用性がある。三、生涯発達各段階に適切である。四、文化的な配慮がなされており、柔軟に用いることができる。

PFAでは、被災者すべてが重い精神的問題を抱え、長く苦しみ続けるとは考えない。被災者やその影響を受ける人々が苦しむのは、広範囲にわたる初期反応（身体的、心理的、行動上、スピリチュアルな問題）であり、その中で強い苦痛を引き起こすものが、時に適応的な対処行動を妨げる原因となる。そのため、共感と気づかいに満ちた災害救援者からの支援は、初期反応の苦しみを和らげ、被災者の回復をたすける。PFAは、そのためのガイドラインである。

PFAの第二章「安全と安心感」において、悲嘆と信仰の問題（Attend to Grief and Spiritual Issues）が取り上げられ、宗教が提供する儀礼の重要性が説かれている。数珠、仏壇、聖書などの宗教用品は安全感と自己コントロール感を向上させる。その人にあつた祈りの場が確保されることが望ましい。奇跡を信じる人もいるが、それは現実感の喪失ではなく、圧倒的状況を生き延びるためのその人なりの方法だと解釈する。多くの人は、そうした宗教的な観念や儀式に助けられて大切な人の死を乗り越えていく。

これは、宗教が死別者に提供する儀礼が自然回復力を促進する精神的なセーフティネットとして高く評価されていることを意味する。そして、このネットから漏れた人に対して医療や精神保健からの専門的援助が受けられるように連携することによ

って、援助資源の枯渇を防ぐことが可能となる。

PFAにおいて、このように宗教の役割が高く認められている理由としては、チャプレンと呼ばれるトレーニングを受けた聖職者たちがその作成過程に加わっていることが挙げられる。

法華山一乗寺巡礼札からみる西国巡礼者の出身地域について

幡鎌 一弘

西国三十三所第二十六番札所の法華山一乗寺（兵庫県加西市）には、大量の巡礼札が残されており、かねてより注目されていた。現在、二〇〇〇年以後の本堂の解体修理工事にもなう巡礼札の悉皆調査（加西市・科研費の補助）の最後の整理にあたっている。

悉皆調査の概要については、稲城信子編『兵庫県加西市・一乗寺の歴史資料（巡礼札）の調査とデータベース化』元興寺文化財研究所、二〇〇九年）や、幡鎌「巡礼札からみる西国巡礼の信仰形態―天井に打ちつけられた信仰心―」（『天理大学おやさと研究所年報』一六号、二〇一〇年）によって示した。その数が、約二万八千点（ただし、若干の他の奉納物を含む）に及ぶこと、奉納物の多様性、打ちつけられた札の流動性ないし時間的な偏差などが明らかになった。現在、一点ごとのデータベースを作成中であり、従来とは異なった見方が可能になってきている。

十七世紀の札は、微妙に形が異なるが、十八世紀に巡礼指南書の類が数多く出版されて、いっそう平準化されていく。しかし、指南書に従わない地域があり、巡礼の母体となる地域組織